平成 28 年度末に派遣を修了した大学院派遣教員に関わる実践研究報告書

仁淀川町立池川小学校
教諭　徳広　道子

1　研究の成果と課題をふまえた平成 29 年度の実践内容

（1）大学院における研究の成果と課題

鳴門教育大学教職大学院では、『アクティブ・ラーニング手法を取り入れた授業改善』というテーマで研究に取り組んだ。『アクティブ・ラーニング』は現在、『主体的・対話的で深い学び』と言い換えられている。研究の成果として一番に挙げられるのは、授業に対しての考え方が大きく変わったことである。授業は、その教科で身につけるべき学力の定着だけでなく、人と関わる力や学んだことを生かして自分で学びを深めていく力をつけていくものである。また、教師主体でなく、児童主体でその学びが実現できるように、学習課題や学習活動を設定したり、本時のめあてや到達目標の可視化や学び合いの仕方について伝えたりすることも必要だと学んだ。

大学院在学中には置籍校である本校で、学んだことを生かし、毎時間、授業の到達目標を設定し、それが実現できたかどうかＲＰＤＣＡサイクルを回しながら授業改善をし続けた。その結果、『主体的・対話的で深い学び』の『主体的・対話的な学び』は実現できるようになったが、『深い学び』については到達できなかったように感じた。深い学びとはどのような状態になっていればよいのか、また、深い学びを生むための手立てについても研究が十分にできなかったことが課題として残った。

そのため、平成 29 年度は、引き続き『主体的・対話的で深い学び』についての授業改善を進めていくとともに、特に『深い学び』を生むための授業づくりについて研究を進めていくことにした。

（2）平成 29 年度の実践内容

今年度は 3 年の学級担任をしている。また、10 年経験者研修も受講することになっていたため、その研究と合わせて、研究テーマを『深い学びを生むための国語科の指導方法の研究～児童同士の対話的な学びを生かした取り組み～』と設定し、今回もＲＰＤＣＡサイクルを回しながら実践を行った。

①Research 期：実態把握

深い学びについての知識を深めることと、学級の児童の実態把握を行った。

深い学びとはどのような状態のことをいうのか、どのような発言や学ぶ姿が見られたら深い学びと言えるのか、到達点を明確にした。また、その実現に向けての手立てについての知識を深めた。児童の実態把握では良さと課題について分析を行った。

②Plan 期：計画

教材研究や『学習の仕方マニュアル』の作成を行った。

教材研究では、過去に実践されている授業や、先輩教員からのアドバイスをもとに、明確化した深い学びの到達点に向けて、どのような学習課題、学習活動を設定すればよいのかを考えた。『学習の仕方マニュアル』は、児童に対し、自力解決、ペア解決時にはどのような姿を目指してほしいのか、ペア対話、グループ対話の時の話型などを示すために作成した。

③Do 期：実践

事前に計画した指導案による授業を実践しつつも、子どもの言動を生かしながら、共に創り上げることを意識した授業を行った。また、深い学びを生むための言葉がけや資料提示、効果的な板書を心がけた。1 学期は『ゆうすげ村の小さな旅館』(東京書籍)、2 学期は『サーカスのライオン』という物語教材で授業研をおこなった。

『ゆうすげ村の小さな旅館』では、読み手の視点から書き手の視点へと読みの視点を変えること、物語教材を深く読み、つぼみさんと美月さんのお互いを思いやる優しさについて感じられること、学んだことを生かしてあらすじのまとめができること、この３点を深い学びの到達目標として取り組んだ。『サーカスのライオン』では、読み手と書き手の両方の視点から読み深められること、自分の命に代えてでも守りたいという、相手を思う強い気持ちとその中心人物の一生について考えられること、学んだことを生かして同じようなテーマの他の物語を読み、感想を伝え合うことができることの３点を深い学びの到達目標とした。

④Check 期：振り返り

参観者からの助言や、自己分析、児童の授業中の発言、学習感想や振り返りシート、成果物、単元テストの結果から分析を行った。

⑤Act 期：改善

1 学期に行った学習の成果と課題を分析し、課題を改善する指導案を作成した。また教師だけでなく、児童も見通しをもって学習に臨むことができるように、その単元の学習のゴールを示した単元学習計画表(図１）を掲示した。

図１ 単元学習計画表

３　平成２９年度の実践の成果と課題

本年度の実践の成果は『深い学び』についての知識を深めることができたこと、本時のめあてや到達目標の明確化、単元学習計画表の提示による可視化など、『深い学び』を実現するための手立てにより、自分が目指した深い学びが実現できるようになってきたことである。また、児童の学習感想からも物語文が深く読み取れていることや、書き手の視点を獲得した読みができていること、児童主体の学習で学びが深まったことがわかる記述が多く見られたことである。

しかしながら、児童主体で授業を進めていく時であっても、児童だけに任せてしまうと学びが深まらない時がある。教師が出るところ、児童に任せるところをしっかりと見極め、必要に応じて軌道修正をするなど的確な支援方法を身に着けることが必要である。『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた学習環境を整え、児童全員にとって学習が充実したものとなるように、ひとり一人を大切にし、効果的な個別の支援方法も考えていきたい。

教育を取り巻く環境の変化が目まぐるしい現在、自分も学び続けなければ子どもたちに伝えることができない。これからも引き続き教材研究を念入りに行い、自分自身の授業力や生徒指導力を高めるとともに、ＲＰＤＣＡサイクルを回しながら、学びと実践を積み重ね、この取り組みを広めていきたい。